

漱石が直面したのと同じ矛盾や問題を今の私たちも依然として直面し続けている。

～以下、書評「世紀末の預言者・夏目漱石」(著者:東大教授 小森陽一) <評者:作家 奥泉光> (朝日新聞 99.5.9) より～

(・・・・・・は中略部分。太字は引用者による。)

夏目漱石といえば、急速な近代化のなかで、そのもたらす矛盾や問題に苦悩した知識人のイメージがある。これはむろん間違っていないけれど、だとしたら、漱石の生きた時代からおよそ百年経った、二十世紀末、いちおうの近代化をなしとげたとみなされる日本国において、漱石の苦闘は過去のものになったかといえ、やはりそうではない。・・・・・・私たちが漱石と同じ矛盾や問題に直面している現実・・・・・・とは、**人間が国民国家の一員として編成されると同時に、世界資本主義の運動に否応なく巻き込まれていく現実**であり、二十世紀の歴史が明らかにしたのは、「自由な主体」である「近代的個人」が、**国家および資本制のシステムへと、二重に束縛されることなくしてはありえないという事実**である。漱石はなにより、この根本的な矛盾へとその思考を向かわせた・・・・・・。二十世紀の社会と人間をめぐる問題を予見的に考え抜いた思想家、夏目漱石・・・・・・。むろん漱石にだって限界はある。しかし一方で、漱石に限界があるとしたら、その同じ限界を私たちがまた生きている・・・・・・。「漱石のように考えることで、世紀末から新しい世界にむかって生きていきたい」・・・・・・私たちは世界史の巨大な運動のただなかにある自分を緊張のうちに再認識し、「政治対文学」といった古い地平を超えて思考することを促される。